

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	佐賀市立城西中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	学びに向かう集団づくり（開発的生徒指導）

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 活動・研究の意義

活動・研究の狙いは5つある。

- ①すべての生徒をインクルージョンした学校生活の場を設ける。
- ②現行の学習指導要領に沿う主体的・対話的・深い学びの学習を行う。
- ③生徒の輝く場（ワクワク）を設ける。
- ④教師の多様性も受け入れる。
- ⑤未来に備える。

2. 活動・研究の内容・方法等

(1) 主体的・対話的に学びを深める生徒集団づくりをめざした生徒が自律する授業

生徒が自律する授業（自分達で課題を見つけ、それを追究し、自分たちで考え、判断し、表現する授業）では、学校目標に生徒たち自身が、自分たちの力で近づいていけるような課題設定やその課題の提示の仕方を工夫した。教師は、生徒集団が活動する時間を確保し、課題達成のための裁量（選択肢）を与え、生徒自身が課題（めあて）を達成することができたのか自己評価できる授業を積み重ねていった。また、生徒が自身の学んだことを振り返り、新たな課題を見だし、自分に必要な次の行動を考えるような場も設けるようにした。

出番→役割→承認

(2) 開発的生徒指導による個性の伸長～生徒の良さを引き出し、良さを伸ばす～

課題があれば、その課題に気づかせること、気づかせたらどう取り組めば解決するかを考えさせ、自分のできるようにさせることが開発的生徒指導である。気づくことが良さであり、取り組めるようになったことが生徒の良さである。そのためには手立てを仕組まなければならない。学校の教育活動を通して、生徒がやってみたいと思うことを教師が仕組んだり、生徒自身がやろうと思ったことを、できるようになるためにその手立てを仕組んだりして、「できた。」という成就感や達成感をもたせる。そして、それを承認する場を設定した。

3 活動・研究の成果

(1) 生徒についての研究成果

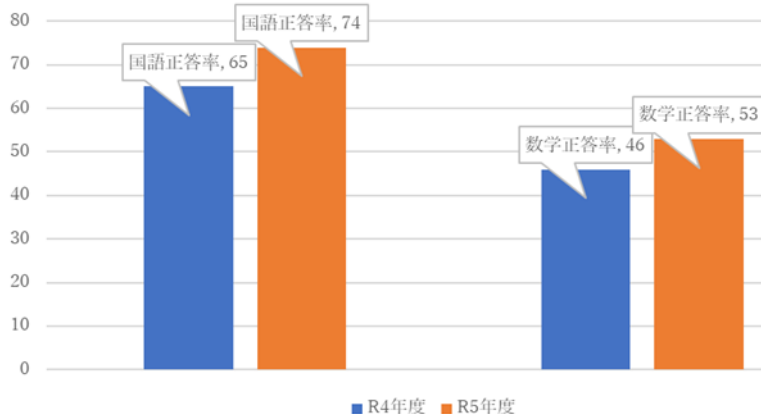
生徒に対して、R4年12月、R5年12月に2回生徒に対して、アンケートを実施した。開発的生徒指導による誰一人残さない教育活動の成果、生徒が自律する授業の成果として、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している」、「自分には良いところがあると思う」、「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めた」、「学習した内容について、よくわからなかった点を見直し次の学習につなげることができた」の3つの項目で改善が見られた。

また、全国学習状況調査において、一定の成果が見られた。

生徒が自己決定して取り組む主体的な学びにより、全国学習状況調査の結果にも、その授業の成果がでている。



城西中学校の全国学習状況調査結果



(2) 教師についての研究成果

校内研の会議における職員の資質向上ももちろんであるが、職員の日々の取り組みに重きをおき、教師についても共感的人間関係を育み、自己存在感を高め、それぞれが共有した情報から自己決定して仕事に向かえるようなシステムづくりをめざした取り組みを始めた。私たち教師も常に学ぶ姿勢を忘れず、忙しい中でなかなか話す機会や意見を交わす機会が少なくても、それぞれの強みを共有し、職員間のつながりを強化していけるような試みを実践している。

取組 1: 授業力向上に関わるデータを蓄積

新しく負印した先生方が情報を得る手立てとして、若手の先生方がベテランの先生方の取組を学ぶ手立てとして、身近な先生の実践から学ぶことができるようデータを蓄積する取組を行っている。忙しい中でも情報交換が活発に行われるよう、校内研のフォルダの中に授業力向上につながるデータを集約した。

取組 2: 演習等の意見を常時共有

研修等の演習等で出た意見は、必ず共有し、職員間のつながりを促すしかけを試みた。

4 課題

<生徒が自律する授業に関する課題>

- ・授業の導入場面で、学習内容との「出会わせ方」や、生徒集団を学びに向かわせる「モチベーションの高め方」には改善の余地があり、この導入場面について職員間で話し合い、いろいろと試行錯誤することが来年度以降の研究では求められると感じている。
- ・生徒の振り返りについて、生徒間で共有する時間・方法についても改善の余地がある。今年度は生徒の個人内評価にとどまる授業が多く、個人用端末をうまく活用するなどして、生徒集団が相互評価をしたり、他者の自己評価を承認したりするような場面を設定したい。
- ・特別支援学級の生徒が集団の一員として学びに向かえない場合、その生徒が個人的に学びに向かう自己決定をするまで、生徒を温かく見守る手立てをとる場面があるが、その手立てよりも有効な手立てがないか、教師としては探し続けていく必要を感じている。

<開発的生徒指導に関する課題>

- ・学校の教育方針・研究のめざすところを職員間で共有し、それを生徒集団にガイダンスを通して伝え、生徒集団が語り合える姿をつくっていくことこそ、生徒指導のあるべき姿であると考え。まず、職員間で学校の最上位目標が何なのか、それを理解するために年度初めにしっかり語り合う場面を設ける必要があると考える。年度初めの忙しさを理由に、この最上位目標の共通理解が疎かになってしまう課題がある。
- ・生徒の承認をする際、学級担任や部活動顧問など、生徒と長い時間直接顔を合わせて関わる職員の負担が大きくなってしまいう傾向がある。生徒の活躍の場を写真に収め、それを掲示物として準備する等は、最前線で生徒と向き合う担任や顧問以外の職員でも取り組めることだと考えるので、職員間で連携して、一部の職員に負担がかかりすぎないような工夫ができると、継続的な取組として来年度以降も続けていけると考える。

<研究の進め方に関する課題>

- ・職員の「徳」を期待して試みた取組が多かったが、不測の事態に対応する場面が今年度は多く、予定していた研究が進まなかった部分も多々あった。やはり、忙しい中でもやる意義があり、時速可能で、職員のモチベーションを上げる取組が必要である。つまり、職員にとって「得」であることが明確な校内研をつくっていく必要があると感じた。